

## 雲南の肉料理につきもの

中国雲南省の省都・昆明で庶民の行くレストランに

もう。マーケットにはそれでえたお金だけもつて物を買ひに來るのである。

## そうか 亞熱帶林と草果

篠原 徹  
(しのはら とおる)

国立歴史民俗博物館教授



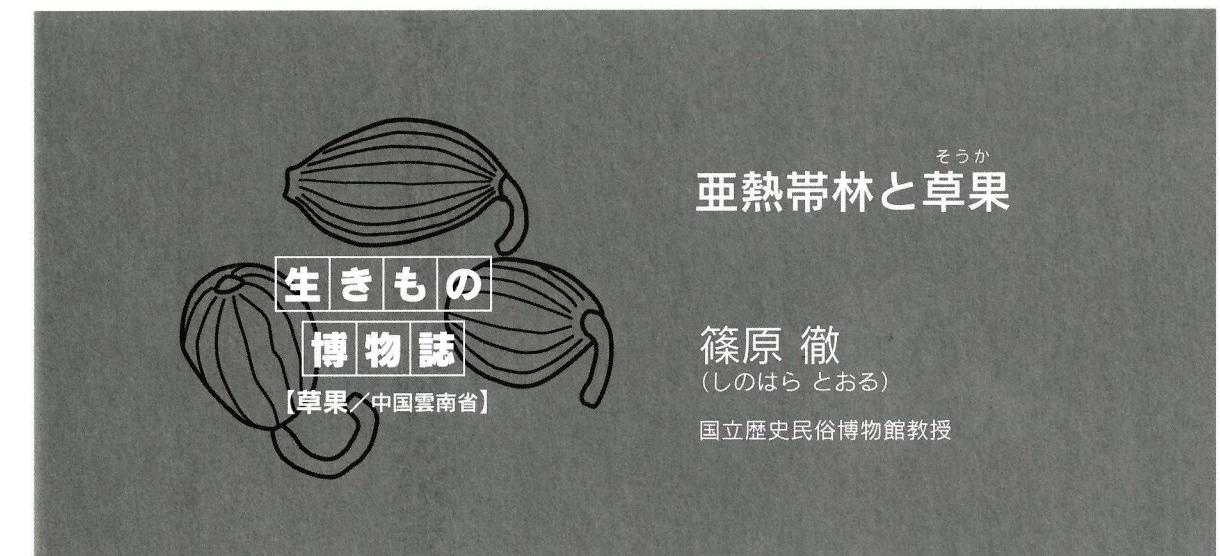
### 草果 (学名: *Amomum tsao-ko*)

ショウガ科のアモム属は東アジアからマレーシアなどの熱帯、亜熱帯に分布し、80~100種ほどが知られている。ショウガに似たものが多い多年生草本である。この属には実がインンド・カルダモンやジャバ・カルダモンなど香辛料や薬用として使われるものがある。草果の実は乾燥して肉料理の香辛料として使われる。花芽はサラダなどの生食としてもおいしい。



帰つてから、たまたま調べていた涪州島近くで、台風に遭い沈没した有名な新安沈没船の植物遺体のなかにこの草果の実があることを知った。一三三三年、この船

は寧波を出て博多に向かっていて遭難し、沈没した。かつて日本にも香辛料として入っていたのかもしれない。そうだとすると沈没船の草果は雲南からはるばる日本



はずである。匂いの主は草果と中国語でいう。雲南の料理にはつきものである。店の主人にこの草果を見せてもらつた。一見してこれはショウガ科の果実であることはわかつた。どこから来て、どんな植物だと聞いたが、「これは樹木に成るよ」といつた。まさか、ショウガ科のものに樹木はないだろ?と思いつつ、产地を聞くと雲南の南だという。これは雲南のカルダモンといつていい芳香である。これが雲南省がベトナムと接する山岳地帯の特産物である草果との最初の出会いであった。

その後、わたしたちは雲南の南にある紅河ハニ族イ族自治州の金平県の者米ラフ族郷の者米を拠点にして、山に住む多様な民族の自然と生活のかかわりについて調査をはじめた。者米は南北を山に挟まれた谷で、河岸段丘にはタイ族が、山腹にはハニ族、ヤオ族、イ族が生活している。現在は政府の定住化政策で山腹に降りて来たラフ族も生活している。他にも別の民族があるが、この人びとが接触するのが六日毎に開かれるマーケットである。ここではハニの人たちが大量の草果を仲買人と取引していた。こうして栽培している近くでこの草果と再び合つた。マーケットでは各民族の得意な農産物があるので、売り手が買い手になり、買い手が売り手になるのだけれども、ヤオだけはマーケットでは買い手でしかなかつた。じつはヤオは山のなかで栽培した草果を村にやつて来る仲買人に売つてしまつた。

わたしは樹林の下の草果の花が咲いていたとき、花を観察していた。するとマルハナバチの仲間がやつて来て、花に潜つて行つた。そのとき、草果はある種のマルハナバチが受粉に特異的にかかわっているのではないかと思った。そしてある種のマルハナバチが一五〇メートル以上にしか分布しない種なのではないかと想像している。高い亜熱帯林でしか栽培できないのであろう。だから山歩きの得意なヤオの特産物になつてゐる。

にも來ていたことになる。雲南の山々と沈没船の不思議な交錯を想像すると楽しい。

## トラやサルのいる山奥で栽培

こうなればわたしたちは山のなかで栽培する草果を見に行かなければならぬ。いつも世話になつてゐるヤオの村へ行き、草果の栽培地に連れて行つてほしいと頼む。これが大変な山奥であり、彼らの出作り小屋はそこにある。彼らの足で四時間くらい、わたしの足では実際一〇時間かかった亜熱帯林のなかに草果畑はあった。トラもテナガザルもまだいると言われる三〇六七メートルの西隆山の向こうはベトナムである。この一帯はブナ科を主体とする亜熱帯林でキヤノピーは閉鎖に近い状態である。ヤオの人びとはこの亜熱帯林のなかで樹を間伐し、その下に草果を栽培していた。これは明らかに彼らが自然とのつきあいで考へだしたものである。ヤオの人びとは数十年単位で移動するらしい。ここに来る前は元陽あたりの山にいたと言う。そこで同じヤオから草果栽培を習つたようだ。草果はヤオの人びとは高度が一五〇〇メートル以上でないと実ができるないと言つていた。